

Bessel 関数に関連する関数とその導関数の特殊値の代数独立性
On algebraic independence of functions related to the Bessel function and their derivatives

○白畑 佑太¹
 *Yuta Shirahata¹

Abstract: We prove Siegel's theorem on algebraic independence of the values at algebraic points of the functions $K_{\lambda_i}(z)$ and their derivatives. Each $K_{\lambda_i}(z)$ is closely related to the Bessel function. The proof involves showing algebraic independence of the functions $K_{\lambda_i}(z)$ and $K'_{\lambda_i}(z)$, and then invoking Siegel-Shidlovskii's second fundamental theorem which guarantees the invariance of transcendence degree at special values.

1. 諸定義と主定理

定義 1. (代数的独立, 代数的従属)

L を体, K を L の部分体とする. $w_1, w_2, \dots, w_n \in L$ が $\forall P(x_1, x_2, \dots, x_n) \in K[x_1, x_2, \dots, x_n] (P \neq 0)$ に対して $P(w_1, w_2, \dots, w_n) \neq 0$ であるとき, w_1, w_2, \dots, w_n は K 上代数的独立であるという. w_1, w_2, \dots, w_n が K 上代数的独立でないときは, K 上代数的従属であるという.

定義 2. (Bessel 関数)

$$J_\lambda(z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{n! \Gamma(n + \lambda + 1)} \left(\frac{z}{2}\right)^{2n + \lambda} \quad (1)$$

を **Bessel 関数** という.

注意 3. Γ 関数は, $\lambda \in \mathbb{Q}$ としても $\Gamma(\lambda) \notin \overline{\mathbb{Q}}$ となることがある (e.g. $\Gamma(\frac{1}{2}) = \sqrt{\pi}$). そこで, Bessel 関数の代わりに次を考える.

定義 4. (関数 $K_\lambda(z)$)

$\lambda \neq -1, -2, \dots$ に対して,

$$K_\lambda(z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{n!(\lambda + 1)(\lambda + 2) \cdots (\lambda + n)} \left(\frac{z}{2}\right)^{2n} \quad (2)$$

とする.

注意 5.

$$J_\lambda(z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{n! \Gamma(\lambda + 1) \cdot (\lambda + 1) \cdots (\lambda + n)} \left(\frac{z}{2}\right)^{2n + \lambda} \quad (3)$$

$$= \frac{1}{\Gamma(\lambda + 1)} \left(\frac{z}{2}\right)^\lambda K_\lambda(z) \quad (4)$$

定理 6. (Siegel [1])

$\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_m \in \mathbb{Q} \setminus (\{\dots, -\frac{3}{2}, -\frac{1}{2}, \frac{1}{2}, \frac{3}{2}, \dots\} \cup \{\dots, -2, -1\})$ ($i = 1, 2, \dots, m$) とし, $i_1 \neq i_2$ ($i_1, i_2 = 1, 2, \dots, m$) のとき $\lambda_{i_1} \pm \lambda_{i_2} \notin \mathbb{Z}$ とする. さらに, $\xi_1, \xi_2, \dots, \xi_n \in \overline{\mathbb{Q}} \setminus \{0\}$ の平方はすべて異なるものとする. このとき, $2mn$ 個の数 $K_{\lambda_i}(\xi_j), K'_{\lambda_i}(\xi_j)$ は $\overline{\mathbb{Q}}$ 上代数的独立である.

2. 主定理の帰着

ここでの定理 6 の証明は [2] に基づく.

定理 7. λ_i, ξ_j ($i = 1, 2, \dots, m, j = 1, 2, \dots, n$) が定理 6 の条件を満たすとき, 微分方程式 $y''_{i,j} + \frac{2\lambda_i+1}{z}y'_{i,j} + \xi_j^2 y_{i,j} = 0$ の非自明な解を $f_{i,j}$ とすると, $\{f_{i,j}, f'_{i,j} \mid i = 1, 2, \dots, m, j = 1, 2, \dots, n\}$ は $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立である.

定義 8. (house)

$\theta \in \overline{\mathbb{Q}}$ とし, θ の共役を $\theta^{(i)}$ ($i = 1, 2, \dots, m$) と表す. このとき, $\max_i |\theta^{(i)}|$ を θ の **house** といい, $|\overline{\theta}|$ と表す.

定義 9. (E-関数)

関数 $f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} c_n \frac{x^n}{n!}$ が次の 3 条件を満たすとき, $f(x)$ を **E-関数** という.

1° $c_n \in K$ ($n = 0, 1, 2, \dots, K$ は代数体.)

2° $\forall \varepsilon > 0, |c_n| = O(n^{\varepsilon n}), n \rightarrow \infty$

3° $\forall \varepsilon > 0, \exists \{q_n\}_{n=0}^{\infty} \subset \mathbb{N}$ s.t. $q_n c_k \in \mathcal{O}_K$ ($k = 0, 1, \dots, n; n = 1, 2, \dots$), $q_n = O(n^{\varepsilon n}), n \rightarrow \infty$

E-関数は, 指数関数 e^x をモデルにしている. 例えば, $e^x, \sin x, P(x) \in K[x]$ は E-関数である.

命題 10. $K_\lambda(z)$ は E-関数である.

定理 11. (Siegel-Shidlovskii の第 2 基本定理)

$f_1(z), f_2(z), \dots, f_m(z)$ を, $f'_i = Q_{i,0} + \sum_{j=1}^m Q_{i,j} f_j$ ($Q_{i,j} \in \mathbb{C}(z)$) を満たす E-関数とし, $f_1(z), f_2(z), \dots, f_m(z)$ が $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立であるとする. さらに T を $Q_{i,j}$ の分母の lcm とし, $\xi \in \overline{\mathbb{Q}} \setminus \{0\}$ が $T(\xi) \neq 0$ を満たすとする. このとき, $f_1(\xi), f_2(\xi), \dots, f_m(\xi)$ は $\overline{\mathbb{Q}}$ 上代数的独立である.

系 12. (F. Lindemann)

$\xi \in \overline{\mathbb{Q}} \setminus \{0\}$ とする. このとき, e^ξ は超越数である.

定理 6 (Siegel) の証明

$K_{\lambda_i}(\xi_j z)$ は, 微分方程式 $y'' + \frac{2\lambda_i+1}{z}y' + \xi_j^2 y = 0$ をみたす. 定理 7 より, $\{K_{\lambda_i}(\xi_j z), (K_{\lambda_i}(\xi_j z))'\}$ は $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立であるから, $\{K_{\lambda_i}(\xi_j z), K'_{\lambda_i}(\xi_j z)\}$ も $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立である. ここで, $y_{i,j,1} = K_{\lambda_i}(\xi_j z), y_{i,j,2} = K'_{\lambda_i}(\xi_j z)$ とすると, $y'_{i,j,1} = y_{i,j,2}, y'_{i,j,2} = -\frac{2\lambda_i+1}{z}y_{i,j,2} - \xi_j^2 y_{i,j,1}$

となるため, 定理 11 より, 任意の $\xi \in \overline{\mathbb{Q}} \setminus \{0\}$ に対し, $K_{\lambda_i}(\xi_j \xi), K'_{\lambda_i}(\xi_j \xi)$ ($i = 1, 2, \dots, m, j = 1, 2, \dots, n$) は $\overline{\mathbb{Q}}$ 上代数的独立である. ここで, $\xi = 1$ とすれば, 定理 6 が得られる. ■

3. 定理 7 の証明

補題 13. 微分方程式

$$y'' + a_i y' + b_i y = 0 \tag{5}$$

$$(a_i, b_i \in \mathbb{C}(z), i = 1, 2, \dots, n, n \geq 1)$$

が次の 3 条件をみたすとする.

- 1° すべての i で, $\exists v_i \in \mathbb{C}(z)$ ($v_i \neq 0$) s.t. $v_i' + a_i v_i = 0$
- 2° (5) の全ての非自明な解は, その導関数と $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立である.
- 3° (5) _{i} の非自明な解 φ_i と (5) _{j} の非自明な解 φ_j は, $u_1, u_2 \in \mathbb{C}(z)$ と代数的関数 w ($w^2 \in \mathbb{C}(z)$) を用いて,

$$\varphi_i = w(u_1 \varphi_j + u_2 \varphi_j') \tag{6}$$

と表すことができない.

このとき, (5) _{i} の非自明な解を f_i と表すと, $f_1, f_1', f_2, f_2', \dots, f_n, f_n'$ は $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立である.

補題 14. $k \in \mathbb{N}$ とする. 関数 z, f_1, f_2, \dots, f_n ($n \geq 1$) が \mathbb{C} 上代数的独立ならば, $z^{1/k}, f_1, f_2, \dots, f_n$ ($n \geq 1$) も \mathbb{C} 上代数的独立である.

補題 15. $a_1, a_2, \mu_1, \mu_2 \in \mathbb{C}, \mu_i - \frac{1}{2} \notin \mathbb{Z}, a_i \neq 0$ とする. φ_i を微分方程式 $y'' + \frac{1}{z} y' + (a_i^2 - \frac{\mu_i^2}{z^2}) y = 0$ の非自明な解とし, $\varphi_1 = w(u_1 \varphi_2 + u_2 \varphi_2')$ ($\exists u_i \in \mathbb{C}(z), \exists w$ s.t. $w^2 \in \mathbb{C}(z)$) をみたすとする. このとき, $a_1^2 = a_2^2$ であり, $\mu_1 + \mu_2, \mu_1 - \mu_2$ の少なくとも一方は整数である.

定理 7 の証明

$f_{i,j}$ を $y'' + \frac{2\lambda_i+1}{z} y' + \xi_j^2 y = 0$ の非自明な解とする. このとき, $z^{\lambda_i} f_{i,j}$ は $y'' + \frac{1}{z} y' + (\xi_j^2 - \frac{\lambda_i^2}{z^2}) y = 0$ をみたす. これは, 補題 13 の条件 1° をみたす. ここで, この微分方程式が補題 13 の 3° を満たしていないとすると, 補題 15 より, $\xi_{j_1}^2 = \xi_{j_2}^2$ であり, $\lambda_{i_1} + \lambda_{i_2} \in \mathbb{Z}$ または $\lambda_{i_1} - \lambda_{i_2} \in \mathbb{Z}$ である. しかし, これは定理 7 の条件に反する. したがって, 補題 13 より, $\{z^{\lambda_i} f_{i,j}, (z^{\lambda_i} f_{i,j})'\}$ は $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立である. さらに, 補題 14 により, $\{z^{1/k}, z^{\lambda_i} f_{i,j}, (z^{\lambda_i} f_{i,j})'\}$ ($k \in \mathbb{N}$) は \mathbb{C} 上代数的独立である. 特に, $k = \text{lcm}(\lambda_i \text{ の分母})$ とすれば, $\{f_{i,j}, f_{i,j}'\}$ が $\mathbb{C}(z)$ 上代数的独立であることが示される. ■

4. 補題 13 の証明

帰納法によって示す. $n = 1$ のときは, 補題 13 の条件 2° より正しい. 次に $n = k - 1$ まで正しいと仮定し,

$$\begin{cases} \mathcal{L} = \mathbb{C}(z) & (k = 2) \\ \mathcal{L} = \mathbb{C}(z, f_3, f_3', \dots, f_k, f_k') & (k \geq 3) \end{cases}$$

とする. つまり, f_1, f_1', f_2, f_2' が \mathcal{L} 上代数的独立であることを示せばよい. f_1, f_1' が $\mathcal{L}(f_2, f_2')$ 上代数的従属であるとすると, ψ_1 が $\mathcal{L}(\psi_2, \psi_2')$ 上代数的となるような (5) _{i} の解 ψ_i ($i = 1, 2$) が存在すると示せる. このことから, $\frac{\psi_1'}{\psi_1} \in \mathcal{L}_1$ が導ける. したがって, 互いに素な多項式 $A, B \in \mathbb{C}(z)[x_{2,1}, x_{2,2}, x_{3,1}, \dots, x_{k,2}]$ が存在して, $A(\psi_2, \psi_2', f_3, \dots, f_k) \psi_1 - B(\psi_2, \psi_2', f_3, \dots, f_k) \psi_1' = 0$ となる. $P_1 = Ax_{1,1} - Bx_{1,2}$ として,

$$D = \frac{\partial}{\partial z} + \sum_{i=1}^k \left(x_{i,2} \frac{\partial}{\partial x_{i,1}} - (a_i x_{i,2} + b_i x_{i,1}) \frac{\partial}{\partial x_{i,2}} \right) \tag{7}$$

を作用させると, ヒルベルトの零点定理より $DP_1 = \omega_0 P_1$ ($\omega_0 \in \mathbb{C}(z)$) が得られる. 次に P_l を, $x_{1,1}, x_{1,2}$ に着目したときに最大次数を持つ P_{l-1} の項の和 ($l = 2, 3, \dots, k$) として, $Q = P_k = A_1 x_{1,1} - B_1 x_{1,2}$ とおく. すると, A_1, B_1 が持つ変数は 1 組であることがいえる. これを $x_{2,1}, x_{2,2}$ とする. さらに, ヒルベルトの零点定理より, (5) _{i} の解 φ_i ($i = 1, 2$) が存在して, $Q(\varphi_1, \varphi_1', \varphi_2, \varphi_2') = 0$ であることがわかる. Q の作り方により, $\frac{\varphi_2'}{\varphi_2}$ は,

$$L_s x^s + L_{s-1} x^{s-1} + \dots + L_0 = 0 \tag{8}$$

($s = \deg A_1 = \deg B_1, L_i$ は φ_1, φ_1' の $\mathbb{C}(z)$ 上 1 次形式) をみたす. したがって, $\varphi_1, \varphi_1', \varphi_2, \varphi_2'$ は $\mathbb{C}(z)$ 上代数的従属であるため, $\exists M, N \in \mathbb{C}(z)[x_{1,1}, x_{1,2}]$ s.t. $\frac{\varphi_2'}{\varphi_2} = \frac{M(\varphi_1, \varphi_1')}{N(\varphi_1, \varphi_1')}$ となる. これを (8) に代入すると, $M|L_0, N|L_s$ が得られる. したがって, M, N は $\mathbb{C}(z)$ 上 1 次形式である. さらに, (8) より, $s = 1$ であるから,

$$\varphi_2' = \frac{S(\varphi_1, \varphi_1')}{T(\varphi_1, \varphi_1')} \tag{9}$$

($\gcd(S, T) = 1, \deg S - \deg T = 2$) が得られる. (9) に D を作用させると, $2TSM = TN(DS) - SN(DT)$ が得られるので, $T|N(DT), S|N(DS)$ となる. ここで, $T = N^q T_1$ ($T_1 \in \mathbb{C}(z)[x_{1,1}, x_{1,2}], \gcd(N, T_1) = 1, q \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$) とおき, $N(DT)$ を整理すると, $T_1 \in \mathbb{C}(z)$ が得られる. 同様に, $S = N^p S_1$ とおくと, $S_1 \in \mathbb{C}(z)$ となる. いま, $\gcd(S, T) = 1$ であるから, $p = 2, q = 0$ である. したがって, (9) より, $\varphi_2' = \frac{S(\varphi_1, \varphi_1')}{T(\varphi_1, \varphi_1')} = \omega_2 (N(\varphi_1, \varphi_1'))^2$ ($\omega_2 \in \mathbb{C}(z)$) となり, $\varphi_2 = \omega(n_1 \varphi_1 + n_2 \varphi_2)$ ($\omega^2 = \omega_2, n_i \in \mathbb{C}(z)$) となる. これは補題 13 の条件 3° に矛盾する. 以上より, f_1, f_1', f_2, f_2' が \mathcal{L} 上代数的独立であることが示されたので, $n = k$ のときも正しい. ■

5. 参考文献

[1] C.-L. Siegel, Über einige Anwendungen diophantischer Approximationen, reprint of Abh. Preuss. Akad. Wissen. Phys. Math. Kl. (1929-1930), no.1, p.1-70
 [2] Andrei Borisovich Shidlovskii, Transcendental Numbers (Walter de Gruyter Studies in Mathematics, 12), Walter de Gruyter, Berlin, 1989.